

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	増 谷 順 子
主 論 文 題 名：認知症高齢者のためのパーソン・センタード・ケアの理論を基盤とした園芸活動プログラムの開発と有効性の検討				
<p>1) 研究背景・研究目的</p> <p>認知症への薬物療法の効果は限定的であり、認知症高齢者の well-being、すなわち心身が安定していて自発的に思いや意思を表出できる状態をもたらすためには非薬物療法に期待せざるを得ない。非薬物療法の中でも園芸活動は、人が植物を世話するという動作体験によって植物は生長し、それに伴って人は感覚体験を得るという人と植物の相互作用に特徴がある。認知症高齢者の園芸活動に関する文献では、植物の生長に感情が喚起され、開花時期や収穫期により見当識が強化されるなど、園芸活動が認知症高齢者の well-being をもたらす可能性が示唆されている。しかし、これまで多くの研究では対象者に認知症ではない人が含まれるなど統制が不十分であったり、認知症高齢者に適した理論に基づく園芸活動方法を用いた研究はほとんどない。</p> <p>本研究の目的は、認知症高齢者の well-being をもたらすために、認知症高齢者に適した理論に基づく園芸活動プログラムを開発し、その有効性を高齢者の量的・質的行動変化から検討することである。このことは認知症ケアの効果的な方法論の開発の一助になると考える。</p> <p>2) 園芸活動プログラムの枠組みの検討と改良プロセス</p> <p>本研究は介入プログラム開発研究の方法論に則り、以下のステップを踏んで開発した。</p> <p>(1) 園芸活動プログラムの理論的枠組みの検討：文献レビューの結果からトム・キットウッドのパーソン・センタード・ケアの理論が認知症の特性を包含し、プログラムの理論的枠組みとして適切であることを確認した。(2) 文献レビューから抽出した園芸活動によりもたらされる行動とパーソン・センタード・ケアの理論における認知症の人の well-being との内容の整合性の検討：園芸活動によりもたらされる行動と認知症の人の well-being との内容が一致することを確認した。(3) 園芸活動の具体的方法とそれに対応した行動観察の視点の検討：文献レビューの結果から9つの構成要素からなる具体的方法とそれに対応した行動観察の視点16項目を抽出し、園芸活動プログラム（第1版）を作成した。(4) プログラムの表面妥当性の確認：園芸専門家との討議により表面妥当性を確認した。(5) ①園芸活動プログラムの改良プロセス（第1版の実施と修正）：第1版を中等度の認知症高齢者3人に試行した結果、期待される行動は全員に認められた。また、農業・園芸経験、運動障害などの個人特性や植物の生長具合によって行動の出現状況に違いが認められたことから、プログラムを修正し10の構成要素からなる具体的方法と対応した行動観察の視点20項目からなる園芸活動プログラム（第2版）を作成した。(5) ②園芸活動プログラムの改良プロセス（第2版の実施と修正）：第2版では、重症度が軽度と中等度である対象者11人に適用した結果、期待される行動は全員に認められ、重症度による出現状況に違いが認められたため、具体的方法を追加した（第3版の作成）。すべての対象者に行動変化が認められ、さらなる修正はないと判断し、これをもって、本論文における有効性を検討する「園芸活動プログラム」とした。</p> <p>3) 「園芸活動プログラム」の根拠をもった展開方法の特徴</p> <p>文献レビューの結果をもとに、根拠をもち新規性のある展開方法を考案した。その特徴を以下に述べる。</p>				

(1) パーソン・センタード・ケアの理論に基づいた次のような 10 の構成要素からなる支援を包含する。①植物の五感刺激による感情表出、②植物の生長への期待感の表出、③植物の生長変化に対する思いの表出、④植物に話しかけるなど植物への愛着の表出、⑤植物の世話による楽しみの表出、⑥継続的な世話による選択、判断、作業の自発性、⑦グループ活動による行動症状緩和、⑧他者との交流、⑨他者に対する思いやりの表出、⑩季節に合った植物の世話による見当識向上、である。(2) 活動想起、楽しみの持続をねらい、6 週間という短期間で収穫まで可能な作業スケジュールとする。(3) 感情表出、役割獲得による自発性、見当識の向上をねらい、介入期は週 1 回 6 週間にわたるセッションを実施し、介入期間中は介護職により対象者の日常のなかでの植物の世話を取り入れる。(4) 他者との交流を促すため、同一の認知症高齢者 4 人で行う。(5) 毎回のセッションでは、前回までに育てた植物の世話による「記憶を呼び戻す作業」と、新たな植物の植えつけによって楽しみや感覚刺激をねらいとした「新たな作業」を組み合わせる。(6) 認知症高齢者の well-being を効果的にもたらすために、看護職や介護職などの専門職で構成したチームアプローチで実施する。

4) 「園芸活動プログラム」の有効性の検討

認知症高齢者 20 人を対象に、平常時 (A : 園芸を行わない 4 週間) と介入期 (B : プログラム実施の 6 週間) からなる ABABA デザインを用いて、「園芸活動プログラム」の有効性を検討した。研究の枠組みとしては、個人特性を持つ認知症高齢者にプログラムを実施することにより、介入期に感情表出、身体・行動の向上、他者との交流、見当識の向上という行動に表れる変化がみられ、介入直後には、意欲、日常生活動作、行動症状、認知機能の尺度の得点に変化すると考えた。評価方法としては、(1) 行動変化は行動観察の視点を用い、20 事例の行動の共通性と相違性を分析した。評価の適切性は、ビデオ録画を併用し複数人による評価内容の一致度により確認した。分析の妥当性の確保は、質的研究者や園芸専門家によるスーパービジョンで行った。(2) 得点変化は Vitality Index (VI)、Barthel Index (BI)、Dementia Behavior Disturbance Scale (DBD)、Mini-Mental State Examination (MMSE) を用い、Friedman 検定を行った。結果、(1) 行動変化は、2 回の介入期ともに、全員に【植物の生長に対する感情表出】【植物への自発的な世話】【植物を媒体とした他者との会話】【天気や季節に対する自発的な認識】が認められ、認知症の重症度、農業・園芸経験、運動障害などの個人特性によって行動の出現状況に違いが認められた。(2) 得点変化は BI に変化はなかったが、MMSE は平常時と比べて 2 回の終了直後ともに有意に増加し (第 1 介入期終了直後 : $p < 0.05$ 、第 2 介入期終了直後 : $p < 0.01$)、VI も平常時と比べて 2 回の終了直後ともに有意な増加 ($p < 0.01$) が認められた。DBD は平常時と比べて第 1 介入期終了直後に減少傾向を示し、第 2 介入期終了直後で平常時と比べて有意な減少 ($p < 0.05$) が認められた。

総括

認知症高齢者に適した理論に基づく「園芸活動プログラム」を開発し、有効性を検討した結果、プログラムの実施により、認知症高齢者に感情表出など行動に表れる質的な変化が再現して認められ、かつ意欲の向上など尺度による量的な変化も再現して認められた。これにより本「園芸活動プログラム」の有効性をほぼ示すことができたと言える。また先行研究にはない短期間のセッションで効果が認められたことは、プログラムを適用していく上で意味がある。今後さらに、「園芸活動プログラム」が認知症高齢者の well-being をもたらすため、看護職・介護職との連携による支援方法となるよう適用性を高めていくことが必要である。